

世界初デジタル最新技術で原寸大に再現

至宝『日本の絵巻物』完全復刻シリーズ

秋山光和監修

第一回配本

平治物語繪

全三卷セット

平治物語繪

三條殿夜討巻





絵巻物は日本が生んだ特有の美術様式で、詞書と絵によって展開するその独特の世界は、美術史的にも文学史的にも宗教史的にも風俗・生活史的にも貴重な存在です。

絵巻物はまた、絵と文章による複合芸術であり、時間性とストーリー性をもった絵画です。それは、今日隆盛をみているマンガ、アニメーションの源流ともいえるべきもので、絵巻物はきわめて現代的な興味の対象でもあります。とりわけ「異時同図法」「吹抜屋台」といった表現方法は、マンガやアニメーションの表現法の先駆をなし、コンピュータグラフィックスの映像表現にも影響を与え、世界的にも注目を集めているところです。

絵巻物は、美術館、神社仏閣、大学、個人等において貴重な美術品として厳重に保管されており、特別陳列を除けばほとんど公開・展示されることがありません。特別陳列も海外において開催されることが多く、国内ではその機会に乏しいため、さまざまな観点から鑑賞されるべき絵巻物にふれることは事実上ないに等しいのです。学術用として、鑑賞用として、より身近に、手にとれる原寸大の複製品あるいは複製品が大いに求められるところです。

戦前から一部の名作絵巻物の複製・複製はなされていますが、モノクロ図版や縮小版が多く、学問研究や美術鑑賞に耐えるものではありませんでした。また、多くの場合、冊子本のかたちで紹介されており、左手で開き、右手で巻きながらストーリー展開を追い、かつ鑑賞するという、絵巻物本来の醍醐味が失われておりました。

このたび、最新のデジタル技術を駆使して豊かな絵巻物の世界を再現する、日本の絵巻物・原寸大複製シリーズを刊行する運びとなりました。筆遣いの息吹さえも感じさせる高いクオリティの複製と、巻物を開き広げ巻き込みながら鑑賞できる巻子本により、絵巻物の神髄を伝えることができると確信しております。

二十一世紀を迎えた今日こそ、日本独自の文化遺産である絵巻物を完全に複製する好機と考え、新しい文化事業として、当社の全力を挙げて刊行してまいります。

六大特色

代表的絵巻物を網羅

美術ならびに歴史の分野において専門書や研究書、あるいは大学・短大の教科書・教材において掲載度の高い国宝クラスの絵巻物を選んで複製。

高品質な印刷

最新のデジタル印刷技術と日本の伝統的な職人芸の融合により、内容豊かな絵巻物の世界を忠実に再現。

優れた印刷効果と耐光性

バガス紙（中性紙）と耐光性の強いトナーを使用することにより、従来にないインクのテクスチャと抜群の色彩効果を実現。半恒久的な保存が可能。

「貼りつなぎ」なし

世界初の絵巻物用画像つなぎソフト（三洋電機との共同開発）により、何メートルにもわたる絵巻物を一枚の用紙に同時印刷することが可能に。実物にもない視覚効果と機能性を実現。

実物と同じ巻子本

原物を忠実に再現しているので、左手で巻き広げ、右手で巻き込みながら鑑賞する絵巻物本来の楽しみ方を実現。

詳細な解説書付き

それぞれの美術館の学芸員、専門の美術史家による解説。歴史資料文献としての価値も多大。

監修者のことば



秋山光和

秋山光和（あきやま てるかず）

大正7年（1918年）京都市に生まれ、間もなく父祖の故地東京に移る。昭和16年東京帝国大学文学部卒業、文学博士、東京国立文化財研究所を経て東京大学文学部教授。昭和54年学習院大学教授。専門は日本の古代中世美術史であるが、中央アジア、敦煌絵画をも研究。

東京大学名誉教授
日仏会館副理事長
フランス学士院客員会員
ブリティッシュ・アカデミー客員会員

主な著書に『平安時代世俗画の研究』（1964年 吉川弘文館）、『王朝絵画の誕生』（1968年 中央公論社）、『絵巻物』（1975年 小学館）『日本絵巻物の研究（上下）』（2000年 中央公論美術出版）、「La Peinture Japonaise」（1961年 スイス・スキラ書店、英・独語版も同時刊行）など。

日本の美術にとって、絵物語・物語絵などと呼ばれたいわゆる絵巻物が、大きな役割を果たしたことはいうまでもあるまい。

「画巻」と呼ばれたこの形式が、他の諸文化と同様中国からもたらされたことは勿論であるが、すでに平安時代初期、九世紀末にはまず中国の物語を和文化した「長恨歌の絵巻」などが作られている。また日本での各種の説話や伝承を絵画化し、詞に絵を続けて絵巻の形としたものが作られたことは、二人の男に求婚された末、生田川に身を投げて自ら命を断つたという生田川処女（菟原処女）の哀話を絵画化し、さらに見る者がこれに歌を添えた由を記述した「かかる事どもの昔ありけるを、絵にみなかきて、故后の宮（宇多天皇中宮、八七二―九〇七）に奉りたりければ」とある『大和物語』の一説からもうかがわれる。

この九世紀末から十世紀にかけての物語絵の内容を大別すれば、『竹取物語』のような民間伝承を母体としたものと、『落窪物語』『うつぼ物語』など創作的な主題によるものとに分けて考えることも出来よう。そしてかの『源氏物語』の巻には源氏方の「竹取物語」絵巻に対し、弘徽殿方からは新造した「うつぼ物語（俊蔭の巻）」が提出され、それは飛鳥部常則が絵を描き、能書家として知られる小野道風が詞を書いたことまで記されている。

そのほか『土佐日記』の絵、『住吉物語』の絵なども十世紀の文献にはさまざまに見ることが出来る。なお現在では詞しか伝わらないが、永観二年（九八四）にすぐ

れた文人源為憲が冷泉天皇の皇女尊子内親王の為に仏教に関係ある説話を集めた「三玉絵」も当初はかなり複雑な物語を絵画化した絵巻であったと推定しうる。

一方、私達が床（当時位置）の上で絵巻を拡げて鑑賞する際、左右の手の間隔は八十センチ前後が適当と思われる。

この点をよく示している絵巻の例は、十三世紀初めに高山寺で作られた「華嚴宗祖師絵」六巻であろう。新羅の僧元曉と義湘が龍の助けによって荒海を渡り中国に渡る物語であるが、場面の変化はほぼこの長さに対応している。

また現存の絵巻では最古と思われる「源氏物語絵」にしても、すでにこの物語が紫式部と呼ばれる宮廷女房によって創作された十一世紀初頭には彰子中宮の為に絵巻化されていたかとさえ推定されている。

現存のこの絵は保存のため詞と絵の境目に当る紙を巧みに分離し、桐箱に納めて徳川美術館と五島美術館とに保存されている。しかしその総量はほぼ当初の四分の一と考えられ、その他に詞のみの断簡十種ほどと、江戸初期に一部補修しつつ切断された「若紫」の図を挙げることが出来る。

何れにせよ、最初に刊行される「平治物語絵」をはじめ、「源氏絵」以下「信貴山縁起絵」「伴大納言絵」など重要な絵巻類が原寸原色の卷子形式で復刻発行されるといふ企画は、私にとっても何よりの欣びであり、美術の研究者並びに愛好家への貢献といわねばなるまい。

日本の絵巻物について

絵巻物は、巻物に描かれた絵で、しかもその絵は物語性をもったものです。「鳥獣人物戯画」のような例外を除けば詞書（文章）を伴っているのが普通で、先に詞書があり、それに対応した絵がきます。その繰り返しが一般的な形式です。

内容的には、それぞれの時代の特色や流行を反映し、「地獄草紙」など仏教教典の絵解き、「信貴山縁起絵」など神社仏閣の縁起、「一遍上人絵伝」など高僧伝、「源氏物語絵」など文学、「伴大納言絵」など説話、「平治物語絵」など合戦記等々ヴァリエティに富んでいます。

形は一般の巻物と同様で、縦三十センチ×横五十センチほどの紙を糊で貼りつないでゆき、左端に軸、右端に表紙をつけて巻いてあります。横の長さは、普通十メートルくらい。長いものと二十五メートルくらいになります。二十メートルくらいのもので、巻くと直径五センチほどの太さになってしまい、持ち運びや保存も容易で、先人の智慧が読み取れます。

見方は、絵巻物を机の上に置き、左手で開き広げ、右手で巻き取りながら、右から左へと見てゆきます。いっぺんに見られるのは、つないだ紙一枚分くらいの八十センチほどです。詞書



「信貴山縁起絵」飛倉の巻 部分 国宝 12世紀 奈良・朝護孫子寺

を読み、どんな場面が出てくるのか考えながら、自らの手で開き広げ、巻き込みます。そのたびに画面が変わり、ストーリーが展開してゆきます。ここに絵巻物を鑑賞する醍醐味があります。特に、いくつかの情景が連続して描かれ、時間的にも展開してゆく「信貴山縁起絵」「伴大納言絵」などは、横に長い画面で構成されており、この感をより深くします。

一方、「源氏物語絵」は、絵巻物とはいえ一枚の紙に一場面が描かれており、挿絵のような体裁になっています。時間的経過を追っているわけではないので、一場面ごとにじっくり味わうことができ、まさに王朝絵巻にふさわしいものといえます。

表現技法としては、「吹抜屋台」「異時同図法」という二大特徴が挙げられます。「吹抜屋台」は、室内を俯瞰して描写する際に、邪魔な建物の屋根や天井を取り除いて描くもので、壁や建具を取り除いているものもあります。「異時同図法」は、一つの背景の中で同じ人物を何度も描く手法です。人物は同じでも、動作、振る舞いは同じではありません。これにより、時間の経過と物語の進展を表現し、日本の絵巻物の大きな特徴となっています。

三條殿夜討巻

ボストン美術館蔵
縦413×全長6995mm

「平治物語絵」は、平治の乱（一一五九）を題材にした軍記物語『平治物語』を絵巻化したもので、鎌倉中期（十三世紀後半）の作といわれています。一七九八（寛政十）年、住吉広行の鑑定により、絵は住吉法眼慶恩、詞書の筆者は藤原家隆のものと認定されました。その当時は本多修理忠盈の所藏品でした。明治時代になって、日本美術の復興に貢献のあった東京大学教授・フェノロサの手によってアメリカにもたらされ、ボストン美術館の所蔵となりました。もし日本にあったなら、当然のことながら国宝に指定されるべき名品といわれています。

この巻では、藤原信頼と源義朝の軍勢が後白河上皇の御所・三條殿を襲って火を放ち、上皇を大内裏へ拉致する場面が描かれています。詞書に続いて、三條殿炎上の報に参入を

平治の乱

平治元年（1159）12月に起こった内乱。保元の乱（1156）で戦功のあった平清盛と源義朝の間に勢力争いが起こり、清盛は後白河上皇の寵臣信西（藤原通憲）と結んで義朝を圧倒。義朝は、信西と対立していた藤原信頼と組み、清盛が熊野詣でに出かけたすきに挙兵、上皇の御所・三條殿を襲った。上皇は幽閉され、信西は難を逃れたものの、捕らえられて殺害された。急遽都に戻った清盛は、二條天皇と上皇を脱出させ、義朝軍と激突、勝利を収めた。信頼は斬罪、義朝も尾張で殺された。

藤原信頼（1133～59）

後白河上皇の院政を支える院別当として活躍。権中納言・右衛門督。同じく上皇の信任厚い信西に官途を妨害されたのを不満として、義朝と結んで挙兵。しかし、清盛に敗れ、六條河原で処刑された。

源義朝（1123～60）

保元の乱で後白河天皇方につき勝利する。その後、清盛と対立し、信頼と結んで平治の乱を起こすが、敗北。東国へ逃れる途中、尾張国で家人の長田忠致に殺害された。

後白河上皇（1127～92）

鳥羽天皇の第四皇子。1155年、即位。その翌年に保元の乱が起き、崇徳上皇方を破った。二條天皇に譲位後、5代34年にわたって院政をしいた。平治の乱で二條天皇の親政派を排除したが、その結果、平氏全盛を招いた。



ボストン美術館
Museum of Fine Arts, Boston

ボストンにある、米国最大級の美術館。ヨーロッパとアメリカ美術のコレクションが充実しており、フランス印象派の作品を多数所蔵しているが、それ以上に特徴的なのは東洋美術のコレクションである。

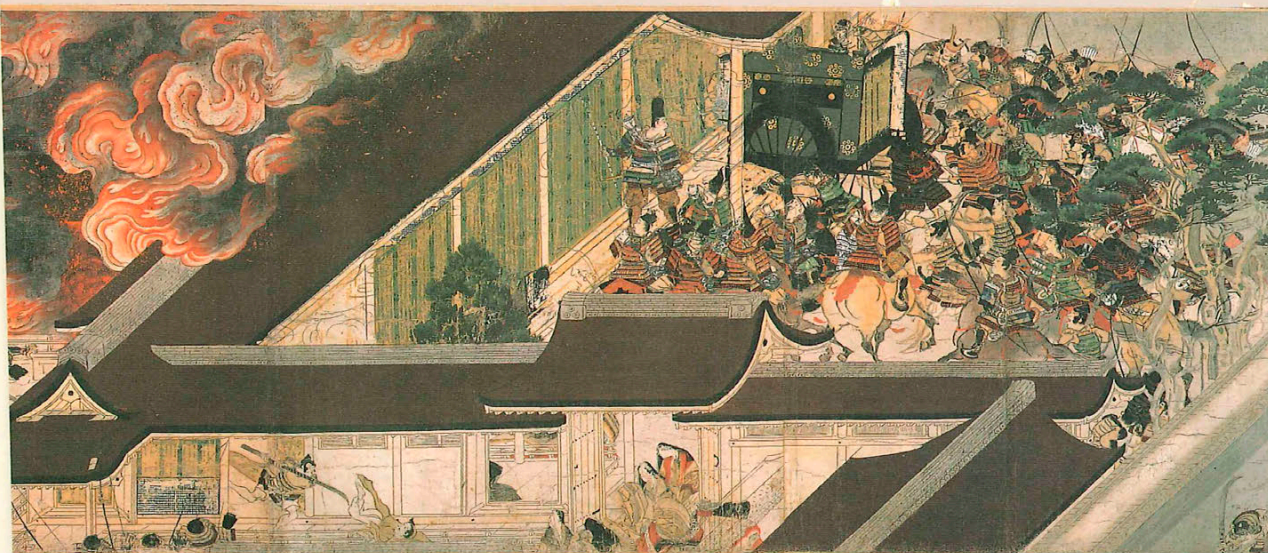
日本美術では、ピゲロー、

モース、フェノロサらボストン出身の熱心な収集家により集められたトップクラスの名品が収められている。「平治物語絵巻」「法華堂根本曼荼羅」「大威徳明王象」「松島図屏風」（尾形光琳）などが著名。岡倉天心もこの美術館の東洋部長を務め、収蔵品の整理に当たった。

急ぐ公卿・殿上人の群れの描写。三條大路を疾走する牛車、牛車。輻に描かれた同心円状の細い線がスピード感と動感を端的に表現しており、今日のマンガの手法に通ずるものがあります。牛車と騎馬と徒歩とがごったがえし、そのさまは、まさに「馬車の馳ちがふを雷のごとし天にひゞき地にひゞく事おびたまし」（詞書）です。

三條殿の邸内では、後白河上皇を乗せるべく、寢殿の階隠しに八葉車が寄せられています。すでに寢殿の屋根は火の海。朱と墨で描かれた火炎の表現は、古今東西の美術作品のなかでも最高傑作と評されています。火のはぜる音が聞こえてきそうな迫真の描写です。火炎の下では鎧武者が逃げ惑う公卿の首をはねており、まさに修羅場そのものの。急襲により圧勝した信頼・義朝の軍勢は、上皇を拉致して大内裏へと向かいます。

上皇を乗せた八葉車の周囲を信頼・義朝軍が固め、物々しいなかにも肅々と進んでいきます。絵巻物ならではの静と動の対比により、事件の成り行きを見事に物語っています。



信西巻

静嘉堂文庫美術館蔵

縦427×全長10128mm

伊勢外宮の神主・福島家に秘蔵されていたものです。

明治になって数多くの日本美術の逸品が海外に流失しましたが、そうした風潮を防ぐ意味もあって三菱の第二代社長・岩崎彌助の手にわたり、彼の創設した静嘉堂文庫に収蔵されました。かつては保存状態が悪くなくなった事実もありましたが、現在では美術館において立派に修復もされ、近ますます高い評価を得ている絵巻物です。

この巻では、清盛が能野詣でに出た機会に、信頼が義朝の協力を得て三條殿を夜討ちし、そのあと力を得て一気に信西を排除した経緯が以下の四段に描かれています。

信西一族追捕の公卿僉議と信頼が臨時除目をおこなう段。都を逃れた信西は伊賀の山中で腹を切り、土中に埋められるが、信頼方に掘り起こされて首を斬られる段。信頼が信西の首実検をする段。信西の首が検非違使に渡され、都大路を行き、獄門の棟木にかけられる段。

事変の翌日、内裏では信西一族追捕の公卿僉議がおこなわれ、公卿・殿上人の参内の様子からこの巻は始まります。朱の丸柱の待賢門では警護する鎧姿の武者の群。参内を終えて出てくる公卿。それを迎えようと八葉車を寄せる従者たち。その一方で、主の退出を待つ檳榔毛車と、その従者もいます。

門奥の中庭では、甲冑に身を固めた武士たちが見守るなかを僉議に向かう公卿と退出する公卿が行き交います。その奥では、簾を巻き上げて信頼が臨時除目をおこなっています。

詞書につづいて、次の場面は、松の根方で腹を切って倒れている信西。そのかたわらで

土を掘る従者。荒々しい岩肌と木立が荒涼とした雰囲気を出しています。そこから場面は急展開し、土中から掘り起こされた信西が首を斬り落とされようとしています。それを馬上から出雲前司光保が見つめています。

場面が変わり、光保邸の門前となります。長刀にくくりつけた信西の首を指し示す光保。八葉車から身を乗り出す信頼。詞書につづき、右手に信西の首を先頭にした光保勢。左手に首受け取りの検非違使とその手勢。背景に何も描かれていない三條河原が、寒々とした空気を感じさせます。

検非違使の軍勢はきびすを返し、都大路を行きます。先頭はやはり信西の首。道の両脇では、公卿の八葉車、従者、庶人が息をひそめて見つめ、当時の風俗の簡潔な記録ともなっています。

巻の最終場面は獄門で、棟木に信西の首がかけられ、市井の人々が見上げている図ですが、彩色された庶民の衣服と素描風の首の描法が鎌倉時代のリアリズム精神を見事に伝えています。



静嘉堂文庫美術館
The Seikado Bunko Art Museum

三菱財閥の形成に尽力した岩崎彌助（創業者・彌太郎の弟）とその長男・小彌太によって明治中期～昭和初期に収集された東洋の古美術品多数を所蔵している。日本有数の私立美術館

として、書画・陶磁・漆芸・茶道具・刀剣など充実した内容を誇る。「平治物語絵巻」のほか「倭漢朗詠抄太田切」、俵屋宗達筆「源氏物語関屋澤標図屏風」「曙変天目茶碗」「手掻包永太刀」などの国宝が有名。東京都世田谷区岡本2-23-1所在。



六波羅行幸卷

東京国立博物館蔵
縦422×全長9529mm

豊後日出藩主・木下家から不昧の号で知られる松江藩主・松平治郷の手に渡り、代々松平家に伝わってきたものですが、一九三八（昭和十三）年、松平家の当主であった直亮が他の家宝とともに帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈し、国宝に指定されています。

この巻では、異変を知って熊野詣でから急ぎ帰京した清盛の奇計により二條天皇を自邸へと脱出させた後の経緯が描かれています。物語は以下の四段からなります。

二條天皇が女装して大内裏から脱出、六波羅の清盛邸へと行幸する段。美福門院もまた清盛邸へと御幸する段。これに伴い公卿・殿上人が続々と六波羅に参集する段。信頼が二條天皇の脱出を知って悔しがる段。

詞書から、すぐに場面は、三種の神器の一つ神鏡を奉安する温明殿へ。今まさにその神鏡を収めた唐櫃を義朝の郎党が持ち出そうとしています。吹抜屋台の画面では、簾の緑、唐櫃と鎧武者の朱の色がひととき鮮やかに映えます。次の場面は大内裏最北の朔平門。一輛の八葉車が出てきます。信頼・義朝の手勢がそれを取り囲み、誰何します。門前で検非違使が「怪しい者ではない、女房たちだ」と弁明しますが、軍兵は追及の手を緩めず、簾をめくつてのぞきます。しかし、検非違使の言葉どおり中には女房が三人。女装した二條天皇の大内裏からの脱出はこうして成功します。危機を脱した帝と

平清盛（1118～81）

平治の乱では信西（藤原通憲）と組み、藤原信頼・源義朝に勝利する。1167年、太政大臣。娘徳子を高倉天皇の中宮とし、その子安徳天皇が即位するとともに天皇の外祖父となり、平氏全盛時代を築いた。

二條天皇（1143～65）

後白河天皇の第一皇子。幼時、美福門院に養われる。1158年、即位。父の院政に対抗して親政を行おうとしたが、果たせなかった。平治の乱では信頼・義朝らに一時幽閉されたが、清盛の六波羅邸へ脱出する。

美福門院（1117～60）

鳥羽上皇の皇后。近衛天皇の母。近衛天皇が崩зると、崇徳上皇の皇子重仁親王を退け、後白河天皇を即位させ、保元の乱の原因をつくった。



東京国立博物館
Tokyo National Museum

1871（明治4）年に湯島
の聖堂大成殿を博物館に
し、82年に旧寛永寺本坊
跡の現在地に移転、開館し
た。旧帝室博物館。1947
（昭和22）年、現名に改称。
本館（日本美術収蔵）、東洋
館（東洋美術収蔵）、表慶館

（考古品収蔵）、資料館、法
隆寺宝物館、平成館よりな
る。敷地内には旧池田屋敷
の黒門、旧十輪院宝蔵の校
倉など由緒ある建築の遺構
が移築されている。

日本とアジア各地の美術・工芸・考古品約9万点（国宝149点）を収蔵する、わが国最大の博物館。

その中宮、紀伊の二位局（信西の妻）を乗せた牛車は、折よく出会った平重盛（清盛の長男）の軍勢に守られて、無事六波羅の清盛邸に到着。門前には平家の武者たちが膝を屈して出迎えます。これほど甲冑姿の群像を美しく描いた場面は絵巻物のなかでも稀な例です。二行の詞書のあとに、またまた八葉車。美福門院が清盛邸へと御幸する場面です。つづいて清盛邸の門前。平家の軍兵が腰をおろして控えています。みな表情が明るく、談笑している者すらいます。それもそのはず、御所が六波羅へ移ったようなもので、帝や中宮を迎えた清盛邸には続々と公卿・殿上人が駆けつけています。兵の後ろには公卿たちが乗りつけた牛車や馬が並んでいます。舞台は御所の清涼殿へと変わり、信頼が帝六波羅行幸の噂の報告を受けている場面。そんなはずはないがと、帝を幽閉した黒戸御所の簾をめくる信頼。いない、残念無念と地団駄踏む信頼。時間の経過が異時同図法で描かれています。この巻では、詞書がほとんど場面場面に挿入されており、日本の絵巻物に特有の、弛緩のない画面構成になっています。





体裁・造本

三條殿夜討卷

卷子表紙——小牡丹金茶紋様 新緞子 卷緒——正絹組紐

信西卷

卷子表紙——竜紋唐草紋様芥子色 新緞子 卷緒——正絹組紐

六波羅行幸卷

卷子表紙——一重蔓小牡丹紋様 新緞子 卷緒——正絹組紐

共通仕様

桐 箱——三本入り 印籠仕上げ たとう付き

鬱金包裂——各巻每一枚

軸 先——なら材花梨色塗装

軸 木——吉野杉

見返し——金砂子

題簽——秋山光和筆

解説

三條殿夜討卷——アン・N・モース（ボストン美術館学芸員）

信西卷——小林優子（静嘉堂文庫美術館学芸員）

六波羅行幸卷——池田 忍（千葉大学助教授）

企画製作——トッパン・フォームズ株式会社

企画協力——丸善ブックメイッグループ

刊 行——丸善株式会社出版事業部

本体価格——二七九、〇〇〇円（消費税別）

ISBN4-621-04973-9 C1371

M MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 開発部 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10

Tel: 03-3357-1449 Fax: 03-4335-9419 Email: archives@maruzen.co.jp <http://myrp.maruzen.co.jp/>

お問い合わせ先